

# 55年ぶり春へ

2013.3.14

12月から続いた対外試合禁止期間の解禁を翌日に控えた7日、池田満頼監督は練習後のナインにハッパを掛けた。「打席でどれだけ追い込まれても粘れる。自分たちの良さを出せ」

昨秋の県大会と九州大会計10試合のチーム打率は2割9分5厘。夏の甲子園に出場し、準備不足のまま臨んだ秋だったが、指揮官は「日替わりでヒーローが現れた。出来過ぎ」と振り返る。

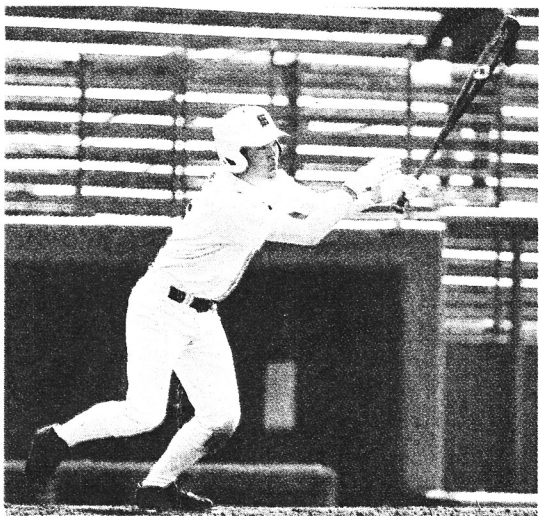
リードオフマンの中川洸志主将は、4割2分9厘とチームトップの打率

## 磨く持ち味

でけん引した。2番川原諒平は10犠打を決めてつなぎ役を務め、3番大竹耕太郎はチーム最多の16打点をマーク。4番安藤太一は17四死球を選んだ。上位4選手でチームの7割超の打点を稼ぎ出した。

課題は5番以降の打線の強化。中でも粘り強く出塁する8、9番の1年生コンビにつなぐためにも、昨夏の甲子園メンバ

打撃練習で快音を響かせる平下（藤崎台）谷川剛



で秋は主に6番を打った平下雄盛が鍵を握る。チーム一の長打力を誇る平下だが、この冬は「ミート力を磨く」と打撃フォームの改造に取り組んだ。

昨秋は県大会、九州大

会とともに決勝は相手の好投手を攻略できずに完封された。このため、チームはこの冬、下半身を中心とした筋力強化と共に、バットを振り込むことに重点を置いた。飛距離が伸びた選手が目立つ中で、川原は「フォームが安定し、スイングスピードが上がった」と手応えを口にする。

濟々巒は伝統的に「四死球や敵失を足掛かりに、小技を絡めて凡打でも点を取る野球」が持ち味。粘り強くつなぎ、たとえノーヒットでも得点を奪うスタイルは、今季も変わらない。

8日、ルーテルと今年

最初の練習試合をした。三回に二つの暴投を絡めて4点を奪うなど早速、足技で揺さぶって相手投手を攻略。「安打なしで得点する、足を使つたうちらしい攻めができた」。中川主将は好スタートを切ったチームにますますの表情を見せた。

10日の「四高定期戦」は、熊本商に7安打で8点、熊本からは11安打で12点を奪い、いずれもコールド勝ち。走者を着実に得点圏に送って集中打で畳み掛けるなど、効率よく得点を重ねた。

「打席では狙い球を絞ること、凡打でもいいから次の塁を陥れるような走塁を徹底させる」。指揮官は本番に向けた課題を挙げる。

# ノーヒットでも得点狙う

(坂本尚志)